えど友ホームページ
http://www.edo-tomo.jp/

EDO-TOMO
えど友

第91号
平成28年
(2016)
5 － 6

江戸東京博物館友の会会報

目次

神田明神と平将門伝説……1～2
友の会 15 周年記念事業特別セミナー
「真田の魅力―兄と弟の戦国時代―」……3
えど友広小路　会員からの投稿「国技館変遷の思い」／えど友サークルだより／新サークル・メンバー募集／館蔵古文書翻刻だより／友の会めも……4～5
友の会セミナー「江戸はさながら花都」……6
友の会セミナー「武鑑を読み解く①大名編」……7
見学会「広重『名所江戸百景』周辺探訪その 14」……8
学習会「中央区立郷土天文館を訪ねる」……9
江戸博クリップ「私のひそかな楽しみ」……9
江戸名所図会を歩く…㉕[千代が崎から致航山満願寺]‥10
催事案内／第８回「えど友研究発表会」発表者募集……11
第 16 回定期総会開催のご案内／会員優待のお知らせ‥12

神田明神と平将門伝説

―主祭神より末席祭神が表に出る不思議な神社―

はじめに

神田明神の祭神は３柱ですが、平将門以外の２柱を知る人は少ないようです。また、神田祭の象徴である千貫神輿は、本社ではなく境内末社の江戸神社に所属しています。だから神輿の正面に「江戸神社」、側面に「牛頭天王（ごずてんのう）」と書かれてあるのです。どうしてそうなのか由来を知りたいと思い調べてみました。

祭神の変遷

神田明神の「神田」とは元来、伊勢神宮へ奉納する稲を植える田圃のことで、全国にありました。江戸の神田は「柴崎村」、現在「将門塚」が立っている付近一帯にありました。そんな神田の五穀豊穣を祈るため、天平２年(730)に大巳貴尊（おおなむちのみこと）(大国主命)を祀ったのが神田明神の始まりと伝えられています。ところが同じ場所には、大宝２年(702)に創建された「江戸神社」がすでにありました。そのような場合、大抵後から入った神社が前の神社を取り込むか、吸収したりするのが普通です。それができなかったのは、神田明神より江戸神社の方が偉かったからです。

▲神田明神

▲江戸神社

その地位が逆転するのは慶長８年(1603)、江戸城拡張に伴い神田明神が駿河台へ移転させられたときでしょう。幕府の後ろ盾もあって、江戸神社を名目上は「地主神」に祀りあげ、実質的には末社としました。一方の江戸神社はこの措置を、すぐには納得しなかったようです。氏子町に定められた南伝馬町旅所へ出かけたのは、ようやく10年後の慶長18年だったからです。

六月七日（慶長18年）、（江戸神社は）神田社地より南伝馬町へ始めて御旅出あり（『武江年表』）

しかし、くしくもこれが江戸神社の祭礼である「牛頭天王祭」の始まりとなりました。名実ともに本社となった神田明神は、元和２年(1616)に再度引っ越しをして現在地へ移ります。その後しばらくすると、平将門を加えて祭神を２柱としました。『江戸名所記』(寛文２年・1662刊)に、「此の社は将門の霊なり」とある

のが最初です。ところが明治になりますと、将門は摂社に落とされ、代わりに少彦名尊（すくなひこなのみこと）を迎えて祭神は２柱のまま据え置かれました。これが復活するのは、将門を主人公にしたテレビドラマがヒットしたおかげです。昭和59年(1984)から将門を復活させ、祭神を３柱(大巳貴尊、少彦名尊、平将門)としました。以来、上位２柱を押しのけ、３柱目の将門が前面に出るようになります。

神田祭と牛頭天王祭

かつては天下祭りと呼ばれ、江戸を代表する祭りの一つであった神田祭は、隔年の９月15日に、１日だけの祭りとして行われました。多くの山車（だし）などが出て盛大ではありましたが、現在とは異なり、道順に従って矢来（やらい）が組まれました。見物人は声を上げてはならず、矢来の後ろから静かに見守るだけでした。

これに対し、境内末社である祇園三社の牛頭天王祭は、毎年６月５日から14日までの10日間にわたって賑やかに繰り広げられました。祇園三社とは、江戸神社(祭神・牛頭天王)を中心に、牛頭天王一家(牛頭天王、妻・頗梨采女（はりさいじょ）、８人の子・八王子)を祀る３末社のことです(現在は三天王社（すてんのうしゃ）となり、すべての祭神が素戔嗚尊（すさのおのみこと）に変更されています)。それぞれの氏子町(南伝馬町、小舟町、大伝馬町)に、祭りの間は旅所が作られました。末社にされた恨みを祭りにかけるさまは、将門の祟り伝説と通じるものがあります。神田明神が将門を祭神に加えたのも、牛頭天王の代理としての意味合いが濃いように思えてなりません。そう考えると、現在の神田祭も牛頭天王を祀る江戸神社の千貫神輿が町中へ繰り出す神幸祭で始まり、元の場所へ戻る神輿宮入で終わるのも納得できます。

将門塚と牛頭天王

現在、将門塚が立っている場所は神田明神発祥地です。同時に江戸神社創建の地でもあることは、先に書いたとおりです。『江戸名所図会』は『風土記』を引用して次のように述べています。

『風土記』に曰く　豊島郡江戸神社大宝二年壬寅　祭るところ素戔嗚尊なり

祭神が素戔嗚尊であるのは、牛頭天王の化身した姿が素戔嗚尊だからです。今は、同じ場所に江戸神社と神田明神が併存していた事実の確認をしておくだけで十分です。

慶長８年、江戸城拡張に伴い両社とも移転しますが、跡地は大名屋敷になりました。その際、江戸神社境内に残されてあった古墳は、若干手

▲明治 40 年ごろの将門塚（『平将門故跡考』）

を加えただけで庭園の築山として再利用されました。そのため大きく改変されることなく明治維新を迎えます。その後は大蔵省の所有となりましたが、関東大震災後に取り壊されるまでは当初の姿をとどめていました。

この古墳を「将門塚」と呼ぶようになったのは、明治40年(1907)ごろからです。同年に刊行された『平将門故跡考』が、「平将門の塚は(967年ぶりに)明治の昭代に顕れたり」と書いたのが最初です。同書刊行の目的は、次の２点を証明するためでした。

①平将門が起こした「天慶の乱」は誤伝であるから、真実を伝え功を賞すること。

②３千年の歴史を誇る我が国だが、反逆者など一人も出さなかった素晴らしさを証明。

世に将門、偽都を作り僭号を立て、天位を覬覦したる如く伝ふるは、全

▲取り壊し中の将門塚
（大正 13～15 年ごろ）（『江戸伝説』）

く稗史の誤伝なり。(中略)将門は功ありて、将に賞せられんとしたるほど(以下略)

我邦、三千年来未嘗一人の天位を覬覦するものあらず。(以下略)(『平将門故跡考』)

同書本文は「平将門之塚」と書くものの、挿絵の説明は「古塚」です。まだ「将門塚」説が流布していなかったからです。これが大正15年(1926)刊行の『江戸伝説』になりますと、「将門塚」が定着したようです。しかし、現在では必ず書かれる「祟り」伝説はまだありません。反面、『平将門故跡考』の残影はあったようで、次の一節を載せています。

▲現在の将門塚

江戸ッ子が逆賊将門を崇拝すると云ふので、笑ふ人もあるが、将門を逆賊扱ひするのは当を得たるものではないと思ふ。(『江戸伝説』)

現在いわれる神田明神や将門塚に付随する「伝説」の大半は、昭和になって作られたものです。また、将門が祀られた始めは、神田明神の地主神・江戸神社の祭神を反映したものでしょう。地主神なら、上位２柱を差し置き(平将門が)前面に出るのも納得できます。

【取材】文・写真：広報部会・光田憲雄

参考資料：『江戸名所図会』、『江戸名所記』、『武江年表』、『平将門故跡考』、『江戸伝説』

第161回　友の会15周年記念事業特別セミナー（平成28年2月28日）

真田の魅力 ―兄と弟の戦国時代―

講師　小和田　哲男さん（静岡大学名誉教授・文学博士）

危急存亡の危機に見舞われた真田家

本日は真田兄弟(兄は信幸、弟は信繁)についてお話しするわけですが、まず、確かな古文書に「幸村」と記されたものはなに一つなく、「信繁」と呼ばれていました。生まれについては諸説ありますが、父・昌幸の次男として永禄10年(1567)誕生というのが通説になっています。東信濃の一角を所領する父・昌幸は武田陣営にありましたが、天正10年(1582)その武田が滅亡してしまうと、甲斐や信濃は織田信長のものとなり、真田家は信長の配下となりました。ところが、その信長が本能寺の変で亡くなると甲斐・信濃は北に上杉、東に北条、南に徳川など有力大名に狙われる争乱の地域になりました。どこかに付かない限り、生きていけない小さな真田家にとって危急存亡の時期でしたが、昌幸は情報収集などを駆使した結果、最初は北条、それから徳川と陣営を変えます。さらにその後、上杉と結び、19歳の信繁を人質として上杉家に送りました。この後、上田城をめぐって昌幸は徳川軍と戦い勝利します。いわゆる第一次上田合戦で、兄・信幸は参戦していますが、信繁は上杉家にいたので参戦していないというのが通説です。ですが、私は信繁を上杉から一時的に連れ帰して初陣を飾らせたのではないかと考えています。その後、父・昌幸は短い期間に力をつけてきた豊臣秀吉と結び、信繁をひそかに上杉から呼び戻して、今度は豊臣家に人質として送りました。

徳川秀忠、関ヶ原遅参

通説では、信繁24歳のとき、親子3人で小田原攻めに加わったときが初陣となっていますが、先に言いましたように、24歳で初陣というのは遅過ぎるのではないかと思います。当時一般的には17か18歳で初陣を飾っていましたから……。

秀吉のもとにあって相当目をかけられていた信繁でしたが、その秀吉が亡くなってしまいました。当時6歳の秀頼の豊臣政権は続きましたが、五大老の中の徳川家康と石田三成との反目、抗争は日増しに強くなりました。家康は、晩年の秀吉、特に弟・秀長亡き後の秀吉は人が変わったような狂った行動を繰り返したので、諸大名たちが豊臣政権に反感を持ってきたと思い、“天下は力あるものの回り持ち”と次第に考えるようになっていました。こうした緊迫した状況のもと、三成から昌幸に加勢の密書が届きます。親子3人が犬伏(いぬぶし)(いまの栃木県佐野市)に集まって話し合った結果「犬伏の別れ」となりました。兄・信幸は徳川四天王の一人といわれた本多忠勝の娘・小松姫を娶(めと)り、信繁は石田三成と盟友だった大谷吉継の娘と結婚していましたので、信幸は東軍、信繁は西軍ということになりました。このとき信繁は34歳でした。

慶長5年(1600)9月、3万8千の本隊を率いた秀忠は中山道を進み、昌幸、信繁親子がいる兵3千ほどの上田城を、ひとひねりで潰せるという気持ちで攻めます。第二次上田合戦です。ところが、ここで9月5日から8日まで真田親子にいいようにあしらわれ、翻弄(ほんろう)されて結局諦めざるを得ませんでした。家康が激怒する秀忠関ヶ原遅参となりました。

大坂冬の陣、夏の陣

関ヶ原の戦いでは西軍が負け、石田三成が殺害される一方、真田親子は処刑されず高野山流罪となったのが不思議な気がしますが、そこは本多忠勝の娘と結婚していた信之(信幸)が自分の手柄を返上する代わりに命だけは助けて欲しい、という嘆願が利いたのだと思います。その後、真田親子は高野山のふもと九度山(くどやま)蟄居となりました。兄・信之から仕送りがあったとはいえ、九度山での蟄居生活は難儀を極め、冬はとても寒かったでしょう。そんな中、昌幸が65歳で他界(信繁は45歳)します。父を失った信繁はその後、寂しい心境を家臣だった人に手紙で吐露しています。身も心もかなりぼろぼろになっていたのではないでしょうか。

慶長19年(1614)10月1日、家康の豊臣潰しが本格的に始まりました。豊臣方追討令を全国に発したのです。豊臣方から助力要請を受けた信繁は、うつうつとした心境を振り払うように九度山から抜け出して大坂城に入りました。若い頃より、武田、上杉、豊臣、それに父・昌幸の戦(いくさ)の仕方を目の当たりにしてきた信繁は戦いのやり方を身に付けていたのです。大坂城の総構えの外に「真田丸」という大きな出城を築き、徳川軍を大いに悩ませ、翻弄しました。さすがの家康もこれには音(ね)をあげ、また豊臣方も2、3kmの遠くから天守に撃ち込まれる大筒に半ば参ってしまい、12月に和議が成立、冬の陣が終わりました。

翌年5月の夏の陣は、家康の謀略により外濠を埋められてしまった豊臣方の完敗でした。このとき信繁は負け戦を覚悟、あとはもう家康を殺すしかないと家康の本陣を2度まで襲いますが、逃げられてしまい、ついに49歳の生涯を閉じました。

「真田日本一の兵(つわもの)」という記録が薩摩の記録には残されました。こうして信繁は名を残し、兄・信之は家を残したのです。　参加者333人。

【記録】文・写真：広報部会・福島信一

会員からの投稿

国技館変遷の思い

髙　澤　金　吾

私の小学生時代は大相撲横綱双葉山の全盛時代で、学校でも相撲が大流行、休み時間は校庭に土俵の円を書くスペースがなくなるくらいに土俵だらけで皆相撲を取ったものだ。体操の時間に砂場で相撲を取ることもあった。国技館との出合いは昭和15年1月小学4年生の時である。春場所の11日目に両親に連れられ初めて両国の旧国技館へ行き、ラジオや写真、メンコでしか知らなかった相撲・力士を生で観ることができた。この日、憧れの横綱双葉山が29連勝中で30連勝がかかっていた大一番で前頭筆頭の五ツ島に叩き込みで敗れ、座布団が乱れ飛び館内が大騒ぎとなり、私も口惜しくて思わず泣き出し母に宥(なだ)められたのを覚えている。その後戦災で国技館が焼け、雨漏りのする中で非公開の場所が行われたことがあり、友人の紹介で観戦したが照明も暗くひどく寂しいものであった。

やがて終戦となり進駐軍に接収修復されメモリアルホールと名称が変わったが、昭和21年秋、特別に大相撲本場所が行われたことがあった。その時も観戦することができたが、館内は全体クリーム色で明るく、照明の暗かった焼けた国技館に比べて力士の肌が綺麗で生き生きとしており、戦争が終わったとしみじみ感じた。その後、明治神宮や後楽園球場などで観客席に屋根がない晴天のみの興行があったが、昭和24年1月に浜町公園に仮設で足場丸太を組み、周囲は莚や幕等で屋根は柿葺きの仮設国技館ができて本場所が行われた。学校の帰りに友人と壁の莚からもぐり込み、こっそり力道山や神風の相撲を観戦した楽しい思い出ではあったが、この浜町場所は二場所限りであった。やがてしばらくして蔵前に常設の国技館が完成した。この時は砂かぶりでの観戦の機会があった。この場所から土俵の四本柱が取り除かれ、神明造の屋根が天井から吊下げられる様になったので、大分観易くなった。そして約30年間この蔵前国技館での場所が続き、昭和60年に現在の新国技館となったのである。新国技館ではずっと後になり平成18年初場所の千秋楽を観戦することができた。この時は大関栃東が横綱朝青龍を下し優勝した。だが、この時以来長い間日本出身力士の優勝が途絶えていたが、今初場所で大関琴奨菊が10年ぶりに優勝したのは喜ばしい出来事である。戦中から戦後まで国技館は時代に翻弄され数奇な運命を辿ってきたが、私はたまたまその変り目毎にその都度入場の機会があった事は何か縁を感じるのである。江戸博を訪れるたびにすぐ隣の国技館を見上げ、改めて思い出がよみがえってくる。

えど友 サークルだより

◆落語と講談を楽しむ会

2月18日(木) 国立演芸場で落語家による鹿芝居(しかしばい)「品川心中」を鑑賞。芝居の前に座長11代目金原亭馬生はじめ出演者6人が落語を披露した。参加者21人。

3月15日(火) 相田士郎さんの月番で要領よくまとめられた落語の歴史を聞いた後、落語に見る江戸の「悪」文化として悪所噺の三遊亭円生と金原亭馬生のDVD「鰍沢」と会員太尾亭狸久さんの「宿屋の仇討」を取り上げ解説した。参加者14人。

◆藩史研究会

2月12日(金) 国定美津子さんが「常陸国府中藩」について発表した。常陸国の歴史とともに府中(茨城県石岡)藩の立藩の経緯、城、名所旧跡、江戸藩邸、歴代藩主の事跡など詳しく解説された。参加者13人。

3月18日(金) 小関征三さんが「豊前国中津藩」について発表した。中津藩主は黒田から細川・小笠原・奥平と変遷した。黒田孝高・長政の足跡、細川忠興とキリスト教、小笠原家時代の失政、奥平家の藩医前野良沢や福沢諭吉などについて詳しく丁寧に説明された。参加者17人。

◆「米屋田中家文書」を読む古文書の会

2月11日(木) 本日より米屋久右衛門の書いた明治3年の「町用日記」P1～17まで読む。町年寄(ちょうどしより)が市中改正で廃され、その仕事が地主たちに3年間無給で課せられるとの通達に関するもの。参加者10人。

2月26日(金) P18～30まで読む。新たな居附地主の仕事が記されている。参加者10人。

3月10日(木) P31～43まで読む。5月13日より25日までの出来事を細々と記述。参加者10人。

3月25日(金) P44～65まで読む。東京府へ一部の芸者と世話方から出された芸者取締仕法書ならびに願書の内容と経緯。参加者9人。

◆江戸東京を巡る会

2月21日(日) 関東有数の日蓮宗の大寺、池上本門寺と近隣の区立池上梅園を訪れた。本門寺では加藤清正ゆかりの遺蹟や紀州徳川家をはじめ大名家の夫人達の墓を回った。梅園は紅白梅が満開で馥郁(ふくいく)たる香に酔いしれた。参加者40人。

◆『江戸名所図会』輪読会

2月18日(木) 担当は生野美知代さん。神楽坂一帯はまだ町名に若宮町、袋町、横寺町、赤城元町などの古い名が残っている。若宮町には若宮八幡宮が、赤城元町には上野国の牛込氏(元大胡氏)が故郷赤城山の赤城明神を勧請した現赤城神社と、町名の由来がわかりやすい。牛込城とその周辺想像図など、多くの資料が紹介された。参加者17人。

3月17日(木) 担当は中川博允さん。新宿区榎町、弁天町、原町など今でも古い町名の残っているエリアの、

主に4つのお寺が解説された。済松寺の開基・祖心尼は春日局の姪で補佐役として大奥にも入った人である。弁天町の宗参寺には開基である牛込氏の墓のほか、山鹿素行の墓がある。この辺りは他にも関孝和、林氏墓地(林羅山)など有名人の墓が点在している。参加者18人。

◆「落語で江戸散歩」をなぞる会

2月4日(木) 浅草木馬亭で講談、浪曲(木馬亭が日本で唯一の定席)を鑑賞した。中トリの玉川奈々福、トリの澤孝子の見事な「節」(曲の部分)と「啖呵」(せりふの部分)をたっぷり楽しんだ。参加者45人。

3月17日(木)『えど友』第59号10頁の「落語で江戸散歩⑱孝行糖」をなぞって歩いた。神田明神から湯島聖堂に行き、大成殿で開催中の「孔子像復元研究成果公開」を見学。元町公園から水道橋交差点、小石川橋(小石川御門跡)を経て現在の小石川後楽園東門前でかつての「水戸様の門前」を偲び、「孝行糖を売る与太郎」に思いを馳せた。礫川(れきせん)公園から東京都戦没者霊園に行き参拝見学するとともに、広大な「水戸様の全容」を眺め、解散した。参加者40人。

3月20日(日) 1回目と同じコースを巡った。参加者35人。

◆日本の大道芸伝承会

2月17日(水) 深川江戸資料館が3月19日(土)に開催予定の「江戸の物売りと大道芸」へ今回も応援出演することになった。いつまでも続けられるよう発声練習(外郎売り、がまの油売り)のあと、基礎練習をしっかりした。参加者4人。

3月9日(水) 基礎練習したあと、七色唐辛子売り、南京玉すだれ等を練習した。参加者4人。

3月19日(土) 深川江戸資料館主催の「江戸の物売りと大道芸」へ今回も応援出演した。3連休初日今日だけの雨。おかげで1回目はいつもの1割強の30人位、雨が上がった午後は120人ほどの来客があった。参加者4人。

◆江戸を語る会

2月27日(土) 大森美恵子さんが「今につながる江戸の食文化」の演題で発表した。江戸百万都市の胃袋を満たす食材の供給のシステムの確立(魚河岸、やっちゃば)や地場産業の隆盛(地廻り物)、歴代将軍の食に関する興味深い逸話も紹介された。参加者9人。

◆かっぽれの会

2月3日(水) 入門曲「奴さん」をお稽古した。今回から2番(姐さん)に入った。参加者3人。

3月休会。

●各サークルとも引き続きメンバーを募集しております。参加希望の方は、はがきに①サークル名②会員番号(必須)③氏名を記入の上、友の会事務局へお申し込みください。ただし輪読系の2サークルについては定員に欠員が出たときに先着順で参加いただけます。

●新サークル・メンバー募集●

◆「太田道灌ゆかりの地を訪ねる会」
(略称：道灌倶楽部)

いうまでもなく太田道灌は江戸東京の礎を築いた人であり、「山吹の里」伝説などから文武両道に秀でた人物として知られています。オリンピックの年の大河ドラマに東京ゆかりの道灌を、という署名運動が現在展開中でもあり、私たちが「道灌ゆかりの地を訪ねる」のも意義あることと考えました。幸い太田道灌公18代ご子孫の太田資暁さんが友の会会員におられますので、そのご協力をいただきながら、道灌ゆかりの地を訪ねる会を発足させたいと思います。道灌ゆかりの地はざっと数えても、東京・神奈川・埼玉・千葉に120カ所もありますので、これを毎月1～数カ所訪ねることを予定しています。日帰りで行けるところを対象とし、6月に終了予定の落語散歩の会(略称)の後継企画として、これに近い運営を想定しています。

8月に説明会を予定していますので、ご希望の方は6月末までにはがきで事務局までお申込みください。追って説明会のご案内をお送りします。　(発起人・世話人：松原良)

館蔵古文書翻刻だより

昨年8月20日にスタートした館蔵古文書翻刻プロジェクトは、『町方書上』の第9巻総索引の最終まとめに手間取ったため1月までは午後だけとなり、本格的な活動は2月から始まった。今号から、翻刻プロジェクトチームのA班とB班が交互に活動を『えど友』誌上で報告していく。

◆A班『新古改撰誌記』

『新古改撰誌記』は江戸城内で雑役を担当している「五役の者」の御中間頭の勤方の控え書。「五役の者」とは御中間、御小人、黒鍬之者、御掃除の者、御駕籠之者の総称で江戸城内の門番、城内警備、お使い、行列供奉、土木作業、運搬作業等の雑作業を担当した下働きの御家人をいい、総勢6000人はいたといわれている。

その内容としては職制による羽織の区別、城内で夜間に使用する燈油の配り方、拝領屋敷への不満などの覚書、届、願書、通達などがいろいろ出てくる。

◇参加者：2月4日(木)A班8人。B班9人。2月18日(木)A班8人。B班9人。3月3日(木)A班8人。B班9人。3月17日(木)A班8人。B班9人。

友の会めも(開催日と人数)
平成28年2月～3月

◆役員会2月9日(火)15人。3月8日(火)14人。◆事業部会2月2日(火)28人。3月1日(火)23人。◆広報部会2月16日(火)11人。3月15日(火)12人。◆総務部会2月23日(火)17人。3月29日(火)19人。◆古文書講座　入門編：2月3日(水)午前91人・午後78人。3月2日(水)午前83人・午後75人。初級編：2月17日(水)午前73人・午後58人。3月16日(水)午前78人・午後48人。中級編：2月27日(土)午前45人・午後22人。3月19日(土)午前41人・午後21人。

第160回　江戸東京博物館友の会セミナー（平成28年1月26日）

江戸はさながら花都

講師　田中　実穂さん（江戸東京博物館学芸員）

タイトルの「江戸はさながら花都」は江戸時代初期の三浦浄心著『慶長見聞集』にある言葉からの引用です。1月に見られる花としては蝋梅、水仙、十月桜などがあります。十月桜は博物館の裏手にも何本かあります。正月の縁起物の植物としては千両、万両が有名ですが、先日、旧芝離宮恩賜庭園に行きましたら、一両(アリドウシ)から十両(ヤブコウジ)、百両(カラタチバナ)、千両(クササンゴ)、万両(ヤブタチバナ)までがまとめて植えられていました。百両は、江戸時代、一部のマニアの間で大変な流行をみた植物で、人によっては大金をつぎ込んでより珍しい、新しい品種を求められた植物の一つです。

万延元年(1860)に日本を訪れたロバート・フォーチュンは、英国の王立キューガーデンから派遣されたプラントハンターで、『幕末日本探訪記―江戸と北京』の中で「日本人の国民性の著しい特色は、下層階級でもみな生来の花好きであるということだ」と述べています。日本人の植物好きを外国人が観察した好例です。

「花を愛する」行動

「花を愛する」行動を三つに分類してみました。

① 名所・名木を訪ねる

江戸時代約260年間の最初から植木鉢で花を育てて楽しんでいたわけではありません。最初は花のある名所、歴史的人物に由来する桜、梅、松などの名木を訪ねていました。名木が観光スポットになっていたのです。江戸時代前期の「上野花見図屏風」(江戸東京博物館所蔵)を見ますと、桜の間に緋毛氈を敷いて木と木の間に幕が張られています。幕を持っていない場合には着物を下げていることが多かったようです。この中で酒盛りをしています。この花見の風景は現代とほとんど変わりがありません。他に楽器を奏でている人たちも描かれています。このように、当時の人たちは、桜なら桜が1カ所に植えられているような場所に花の咲く時期に合わせて観に行きました。春は梅、桜、夏は藤、蓮、秋は菊といったように、決まった場所にみんなで観に行くことが多かったようです。

② 購入などにより身近に引き寄せる

嘉永6年(1853)に描かれた歌川国貞の「浅草雷神門之光景」(江戸東京博物館所蔵)を見ましょう。当時、雷門前は移動式の植木屋さんがお店を広げていました。模様のある植木鉢に福寿草、松、梅、万年青などが植えられている様子が描かれています。これらは販売されているものです。

江戸時代中頃に植木鉢が普及すると、コンパクトサイズではありますが様々な植物が植木鉢に植えられた状態での移動が可能になり、人々は町中にいながら購入することができるようになりました。江戸時代の植木鉢は今と比べると派手な模様があり、また鍔がありました。

③ 育てる、集める、比べる

植木鉢は、持って帰ることができます。自分の手元で植物を育てることができます。植物好きであれば、福寿草は160もの種類があり、それらを植木鉢で集めることもできます。

朝顔は、いろいろな形が作られていました。手元で楽しむだけではなく、みんなが植木鉢に植えた朝顔を持ち寄って(集める)お寺の境内などでコンテスト(比べる)が頻繁に行われ、ランキング表(番付)も作られました。朝顔の他に菊、桜草などもコンテストが行われ、番付が作られていました。

園芸と園芸書

日本で初めて刊行された園芸書は、水野元勝が著した『花壇綱目』で、植物名とその栽培技術を記しています。絵や図はありませんが、植物を季節ごとに分類して春の部は福寿草、桜草など35種類、夏の部は花菖蒲、くるま百合など78種類(百合は12種類)、秋の部は桔梗、菊など56種類、冬の部は水仙花、冬牡丹など5種類、雑の部は石竹、長春など6種類が挙げられています。長春はバラ科で日本でも自生していて万葉集にも歌われていました。他に土、肥料についても記述されています。

流行の植物

流行の植物として18世紀では、菊、カラタチバナ(百両)があり、19世紀には葉の鑑賞対象として錦糸南天、万年青、松葉蘭などが、また変化朝顔、菊、花菖蒲がはやりました。植物についての本も多数出版されるようになりました。文政12年(1829)に旗本の水野忠暁が著した斑入り植物の図説集『草木錦葉集』には葉の模様を保つための日照条件など、現代でも十分に通用する技術が記載されています。朝顔は秋水茶寮著『丁丑朝顔譜』文政元年(1818)、菊は菅井菊叟著『菊花壇 養 種』弘化3年(1846)、そして花菖蒲については松平定朝著『花菖培養録』嘉永6年(1853)などがあります。

レポーターからひとこと

花を愛する行動の変遷がよく理解できました。植木鉢の役割、葉を鑑賞するということに驚きました。

参加者96人。

【記録】文・写真：広報部会・前田太門

第162回 江戸東京博物館友の会セミナー（平成28年3月12日）

武鑑を読み解く①大名編

講師　滝口　正哉さん
（千代田区教育委員会文化財調査指導員）

本日は江戸を読み解く手がかりである武鑑のうち、大名についてお話しします。

武鑑とは

武鑑とは、基本的には大名や旗本・御家人の収録されている名鑑です。現存最古といわれているのは寛永21年(1644)に京都で発行された『御もんつくし(紋尽)』で、大名の家紋・名前・領地高・居城・江戸屋敷などが記載されています。多くの版元が参入するようになると内容も少しずつ充実したものになっていき、名称も「紋尽」から「江戸鑑」、「武鑑」へと変わっていきます。

宝永5年(1708)に出版された『一統武鑑』からは内容や構成も統一されていきます。さらに享保期(1716～36)以降は須原屋と出雲寺という二つの版元が版権を独占するようになります。須原屋は明治維新に至るまで毎年刊行を続け、出雲寺は中断を挟みながらも『大成武鑑』という名前で刊行をしています。

武鑑には『袖珍武鑑』という抄録版もあり、名前の似た集覧や大坂・京都の武鑑、『鎌倉武鑑』のような復古版も出されています。また、情報の変更や訂正のため、1年の間に何度も改訂版が出されます。

武鑑は商人が大名や役人に出入りする際に使ったり、地方から出てきた人が大名屋敷や大名行列の見物の手引きに使ったり、参勤交代で江戸にやって来た武士が国元への土産としたりしていました。武鑑は切絵図と共に江戸情報の宝庫であり、当時の人々だけでなく今日の我々が江戸を読み解く非常に重要な史料になります。文化・文政期のものは『文化武鑑』『文政武鑑』として活字化されています。今日は『文化武鑑』から文化11年(1814)のものを使い、構成を見ながら読み解いていきます。

大名家の武鑑を読む

通常の武鑑は4巻からなっています。1巻は大大名(10万石以上)、2巻は小大名(10万石未満)、3巻は江戸城本丸の役人、4巻は江戸城西の丸の役人です。これに「御三家方御付」という御三家付家老の情報を記した巻が付く場合もあります。大名家は格式の高い順にそれぞれ本家・分家がまとめて載っています。今回読むのは①尾張藩徳川家②伊達家③松代藩真田家④宮津藩松平(本庄)家⑤出石藩仙石家⑥陸奥梁川藩松前家です。

まず［姓］が載りますが、①では「尾州家」となっています。次は［本国］で、大名としての発祥はどこかということです。活字版では［系図］は省略されており、［当主の人名］では①の「尾張中納言斉朝卿」のように姓・官職名・名乗が記されています。また②では松平姓を拝領している本家のみ松平を名乗っています。［席次］は江戸城内での大名の詰所で、家格により決まっています。［家督相続年］の次は［位階］で、武家の官位の最高位は尾張家・紀州家の従二位です。［御廉中］［御内室］は正室のことで、実名は記されません。

次は参勤交代の情報です。［参府］［御暇］は江戸へ来る時期と国許へ戻る時期、［献上］は将軍への献上品、［拝領］は将軍からの拝領品です。また、［時献上］とは四季折々に将軍家へ献上する物産で、大名の領地の産物が多く見られます。

［家紋］は正紋・替紋(裏紋)が載っており、続いて大名行列の情報が図入りで載っています。［槍印］は槍の鞘や柄の形状・材質、［爪折］は20万石以上の大名に許される爪折笠の形状、［押］は行列の整理に当たる足軽が着用する着物の柄、［駕］は駕籠かきの着物の印、［纏］は馬印の一つです。また、［船印］［帆幕印］は船につけた幟・幕の意匠で、参勤交代で一部海路を使う大名だけです。

［屋敷地］は江戸屋敷の場所が上・中・下で、蔵屋敷は京都・大坂などの地名で表されます。［菩提寺］は宗派と場所が載っています。その次は家老・用人などの重要な家臣の情報です。③では家老の欄に藩政改革をしたことで知られる恩田民親の子孫恩田木工の名があり、⑤では後に起きた御家騒動(仙石騒動)の関係者の名が出てきます。

［石高］の次の［居城］は城を構えている場合の城の場所、［在所］は城がない場合の陣屋の場所です。⑥の在所は「奥州伊達郡梁川」となっており、この頃は幕府の北方警備強化のため松前の地から追い出されていたことが分かります。［里程］は江戸から居城までの距離で、最後に［歴代城主］の来歴が載っています。

2巻の巻末には［諸大名御隠居方並御家督］として当時健在の隠居者と現当主の一覧があり、隠居者の中には松平定信・松平不昧・上杉鷹山などの有名人の名もあります。

武鑑のもたらす文化

武鑑は江戸の本屋で売られていましたが、大手門・内桜田門の前でも見物人用に携帯版の武鑑売りが出ていました。また、幕末のペリー来航の時には武鑑のパロディ版の形式で瓦版が出されており、武鑑が一般に知られていたことを示しています。

武鑑は役人の部分と合わせてみないと把握しきれないところがあります。次回は役人について読み解いていきたいと思います。

レポーターからひとこと

武鑑の図版は何度か目にしたことがありますが、こんなに多くの情報が含まれているとは思いませんでした。次回の「旗本・御家人編」も楽しみです。　参加者219人。

【記録】文・写真：広報部会・菊池真一

江戸東京博物館友の会　見学会　（平成 28 年 3 月 27 日）

広重『名所江戸百景』周辺探訪
―その14（早稲田・神田川周辺）―

花冷えの日曜日ちらほらの花の下、有楽町線江戸川橋駅に集合出発しました。

江戸川橋から関口へ

今、江戸川橋の下を流れているのは神田川ですが、古くはこの流れは平川、江戸川と呼ばれていました。神田上水が完成してからは、井の頭池から取水口である関口までを神田上水、関口から飯田橋までを江戸川、飯田橋から隅田川までの外堀を神田川といいました。

▲復元された目白下大洗堰跡

江戸川橋を渡って神田川沿いの江戸川公園に入りました。細長いのは目白下大洗堰（関）から取水し本郷・小石川に流した上水の跡だということで公園内に堰が復元されています。またここは椿が自生する景勝地つばきやまと呼ばれ、今はホテル椿山荘（黒田豊前守下屋敷跡）となっている、山県有朋が造園した庭園を拝見しました。近くの水神社の向かいの関口芭蕉庵は上水の監視や普請をする水役をしていた芭蕉が住んでいた水番小屋（水神社の別当寺竜隠庵（りゅうげあん）でもあった）といわれています。「せき口上水端はせを庵椿やま」の絵ののどかな風景を目の前の川の曲がりに重ね合わせてみました。

▲芭蕉庵と水神社

早稲田から高田へ

神田川に架かる駒塚橋を渡り、大隈重信別邸（井伊掃部頭下屋敷跡）だった早稲田大学の敷地を歩きました。昭和36年（1961）構内拡張のため、水稲荷神社、富士塚が移転し古墳である富塚が壊されたとの説明を案内板の前で受けました。

早稲田通りを渡り「一陽来復」のお札で知られる穴八幡神社では女坂の傍にある神社の由来となった阿弥陀如来があった岩穴（ここ一帯は前方後円墳）前に建てられた出現殿や将軍家光から贈られた布袋像の水鉢を拝見しました。将軍吉宗が孫家治の誕生を祝って奉納したのが始まりの流鏑馬は今では戸山公園で行われています。

▲穴八幡神社の布袋像水鉢

高田の馬場は家康の六男松平忠輝の母高田殿が庭園を開いた所で、地名はここから付けられました。「高田の馬場」の絵の場所は住宅街になっていました。

御三卿の清水家下屋敷跡甘泉園（かんせん）の敷地に水稲荷神社と富士塚が早稲田大学構内の拡張に伴い移転しました。こちらでも流鏑馬が行われています。入り口辺りに高田の馬場から移された堀部安兵衛の碑が立っていました。甘泉園は大名屋敷の回遊式庭園の面影を多分に残した日本庭園のある区立公園になっています。

亮朝院（りょうちょういん）には有名な赤い山門の他に黒い鐘楼堂（門）もあり、梵鐘は元禄15年（1702）鋳造です。七面大明神堂の前の石造の金剛力士像1対は宝永2年（1705）に造立されたものです。

都電荒川線が走る道路に沿って神田川が流れています。面影橋のたもとで「高田姿見のはし俤（おもかげ）の橋砂利場」の絵の説明を受けました。広重の絵や切絵図では手前が姿見橋で向こうの小橋が面影橋になっていますが、『新編武蔵風土記稿』や『江戸名所図会』では手前が面影橋、向こうを姿見橋にしています。広重の時代には間違えて混同していたようです。紛らわしい2つの橋の名はこのあたりの伝説（在原業平や於戸姫や徳川家光など）から名付けられたとのことです。

高田の鎮守氷川神社は男体の宮と呼ばれ、新宿区下落合の氷川神社（女体の宮）と合せて夫婦の宮と呼ばれています。毎年正月には弓矢で的を射って災難除けを祈願する「御奉射祭（おびしゃ）」が江戸時代から行われています。鳥居や狛犬は豊島区登録文化財になっています。神田川に沿ってしばらく歩き、高田馬場駅で解散しました。

▲水稲荷神社

神田川の水源地は井の頭の池です。徳川家康が湧水量豊かなこの池を水源とする上水を掘らせ、家光の時に完成し神田上水と名付けました。「井の頭の池弁天の社」の絵は神田上水の水源池になぜなったのかわかるような自然に囲まれた弁才天の社が描かれています。今は都市化が進み、湧水は涸れ果てて深さ146ｍの井戸を水源にしています。

参加者153人。

【取材】文・写真：広報部会・佐藤美代子
（えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています）

江戸東京博物館友の会　学習会
（平成28年２月10日）

中央区立郷土天文館を訪ねる

東京メトロ日比谷線の築地駅から徒歩で７分、聖路加国際病院の真ん前にある中央区保健所等複合施設、その６階に中央区立郷土天文館はあります。人気のプラネタリウムを備えており、明石町にあるところから愛称は「タイムドーム明石」です。

今回の学習会は当初定員40名の限定で、超えた場合は抽選でしたが、館のご厚意により、応募者全員が見学することができました。事業部会の清水さんの説明、事業部会長小林さんの挨拶に引き続き、猿田秀廣図書文化財課次長から当館の概略についてレクチャーがあった後、２班に分かれて館内を見て回りました。

常設展示室は中央区の歴史や文化について、「江戸城下の成り立ち」「日本橋と魚河岸」「商家と職人たち」「蘭学の隆盛と築地居留地」「銀座の繁栄」「中央区の文学」「月島と水辺の文化」の７つのテーマごとに展示されており、担当のガイドスタッフから個別にそれぞれ説明を受けました。その中から大変興味深かったものをいくつかご紹介します。森田、市村、中村（江戸三座）の入場券は、木札に土間とか切落（きりおとし）と書かれており、観客が家に持ち帰ってしまったものだそうです。また、佃島の漁師が将軍の食膳用に献上する白魚を運んだ道具「白魚献上箱」は中央区民文化財に登録されています。朱漆塗の内箱を「御本丸」「御膳御用」と記した黒漆塗の外箱に入れ、それを担ぎ棒に通して江戸城内に運びました。

そしてベルリン東洋美術館所蔵「熙代勝覧（きだいしょうらん）」（複製）ですが、神田今川橋から日本橋間の通町筋を詳細に描写し、江戸日本橋の賑わいは見る者を引きつけて離しません。ちょうど今から10年前、三井記念美術館の開館特別記念展「日本橋絵巻展」で、その全長12メートルの実物の大絵巻を見て感動したことを懐かしく思い出しました。また日本橋生まれの女性歌舞伎脚本家である長谷川時雨の関連資料も多数展示されています。彼女は明治・大正・昭和にわたって、評伝作家、小説家、随筆家としても活躍しました。作家吉川英治は、弔辞の中で「明治に一葉あり昭和に時雨あり…」と称えました。彼女の愛用した紺縮緬袷（ちりめんあわせ）の着物も掛けてありました。面白いところでは、昭和15年（1940）開催予定だった「紀元二千六百年記念日本万国博覧会」、その抽選券附回数入場券です。昭和13年から発売を開始しましたが、第二次世界大戦の勃発とともに延期が決定、幻の万博となってしまいました。

映像コーナーでは、「復元された震災の記録～関東大震災映画フィルム」（25分）と「江戸・明治の明石町」（15分）の２本が上映されました。特に関東大震災の映像には、凄まじい業火に包まれた首都の惨状、生々しい被災状況が映し出されています。そんな中にあって、被災者たちの驚くほどの秩序だった行動、落ち着いて避難する様子がとても印象的でした。そして日本全国から続々と寄せられる救援物資、救助活動の様子などが克明に記録されており、それは５年前のあの東日本大震災を彷彿とさせるものでした。日本人の絆、困難な状況に陥った時の助け合う心、団結力の強さを改めて感じました。

参加者62人。

【取材】文・写真：広報部会・岡本　脩

江戸博クリップ

私のひそかな楽しみ

展示事業係　学芸員　津田紘子（つだ　ひろこ）

８月から江戸東京博物館で学芸員として働いています、津田紘子と申します。その前は公立の小学校で図工の先生をしていました。

教員１年目のとき、初めての社会科見学引率が江戸博でした。当時は何をすればいいのかわからず、子供たちが学校でのヤンチャな顔を隠して見学している様子を、ただただ眺めていただけだったように思います。唯一の役割が、集合時間に展示室に残っている児童がいないか、確認してまわることでした。とはいっても広いので、一人二人見逃していても気づかないのではないかと自分を疑いながら、出口に向かっていったのをよくおぼえています。

江戸博の学芸員として働く今でも、黒電話やアイロンなど昔の道具に触れるプログラムを展示室でやっていると、子供たちや先生たちの様々な姿を目にします。一生懸命受け答えをしてくれて、メモまでとる子もいれば、こちらの問いかけにいかに面白い答えを出すかということに必死になって、同じ班の子に注意される子がいたり、興味はあるのに友達の興味は他へ向いていて、こちらを遠巻きに見ているだけの子がいたり、子供たちより熱くなって、黒電話の思い出を話してくれる先生がいたり…。道具の説明をしつつ、こうした来館者の様子を見るのが私のひそかな楽しみだったりします。

江戸博に来て感じたのが、ものを通して昔の記憶がよみがえってくると、自然と表情がほころぶということです。江戸博に来た子供たちがいつか大人になって、「なつかしい！」と言いながら展示室での時間を楽しんでくれたらいいなと思います。

◆このコラムは江戸東京博物館のいろいろな職務の方々に執筆をお願いしています。

江戸

名所図会を歩く…㉕

[千代が崎から致航山満願寺]

九品山浄眞寺の上品上生仏

今回訪れる名所は江戸の郊外で、目黒区から世田谷区にわたる広範囲に点在しています。全部歩いて回るとかなり長時間を要するため、一部電車移動しています。歩いたのは梅の花が香る２月中旬でした。

千代が崎から明顕山祐天寺

前回同様ＪＲ目黒駅西口から出発です。権之助坂上から山手線に沿って北へ向かう通り周辺の西向きの高台は、かつては千代が崎と呼ばれていました。ここにあった旧松平主殿(とのも)候別邸(下屋敷)内の千代が池に由来する名で、別邸の号が「絶景観」と名付けられたように景勝の地でした。挿絵には眺めを楽しむ町人たちの姿が描かれていますが、現在はマンションが建ち並んでいます。

急坂を下って田道橋(でんどう)で目黒川を渡り、山手通りを横切ると、うねうねと曲がる馬喰坂(ばくろ)の上りとなります。坂上の十字路まで来ると、いきなりたくさんの石のオブジェが現れました。この先にある高峰山(こうふさん)長泉律院(現長泉院)が設立した現代彫刻美術館の野外展示場です。さらに進むと展示館やブロンズ像があり、長泉院の本堂もモダン建築です。屋上に立つ鐘楼がひときわ目を引きました。

細い道を進んで駒沢通りを左折すると、明顕山(みょうけんざん)祐天寺の板塀が見えてきます。総門正面の仁王門の右手には、開山・祐天上人の事蹟を脚色した歌舞伎「薫樹累(めいぼくかさね)物語」の大正15年(1926)の上演に際して建立された「かさね塚」があります。来年(2017)が享保３年(1718)に没した祐天の300年御遠忌に当たるため、阿弥陀堂や地蔵堂など多くの建物が修復工事中です。本堂にお参りして中をのぞくと、祐天寺幼稚園の園児たちが御勤めを行っていました。脇道を挟んだ墓地の奥には祐天の墓があり、また私事ながら、亡き母もこの墓地に眠っています。

妙法山法華寺から碑文谷八幡宮

脇道を南に歩いて油面(あぶらめん)通りを越すと、商店街のある油面地蔵通りに出ます。通りには油面子育地蔵尊や、私の卒業した油面小学校があります。突き当たりの目黒通りを右方向へ進み、目黒郵便局の手前を左折すると円融寺通りです。この通りがやたらと長いのですが、碑文谷(ひもんや)鬼子母神の五叉路を右に曲がると、ようやく妙法山法華寺(現円融寺)の東門が前方に見えました。

▲長谷川雪旦　千代が崎

この寺は２度名称が改められており、円融寺になったのは図会の出版された天保５年(1834)です。茅葺きの仁王門にある金剛力士像は「碑文谷の仁王さん」と親しまれ、江戸末期には多くの信仰を集めていました。この仁王門や山門・釈迦堂は室町時代建立で当時の様式を今に伝えていますが、ちょうど紅梅が彩りを添えていました。

門前から立会川緑道を右手に進むと、碑文谷村の総鎮守だった碑文谷八幡宮の参道へと続いています。社殿の右側には碑文谷の地名の起源とされる「碑文石(ひもんせき)」が保存されていますが、ガラスケースに覆われており、刻まれている梵字はほとんど読み取れません。裏手から竹林と古民家のある「すずめのお宿緑地公園」を抜け、碑(いしぶみ)さくら通りから西へ歩いて都立大学駅へ向かいました。

九品山浄眞寺から致航山満願寺

東急東横線と大井町線を乗り継いで九品仏(くほんぶつ)駅で下車。駅前の踏切を渡るとすぐ九品山浄眞寺の参道があり、総門をくぐると広い境内に出ます。門の付近には多くのお地蔵さんが点在し、穏やかな笑顔を見せていました。仁王門の先には本堂と向かい合って３棟の三仏堂(上品堂(じょうぼん)・中品堂・下品堂)があり、それぞれ３体の阿弥陀如来像が安置されています。これが「九品仏」の名の由来ですが、この日は中央の上品堂にある３体(上品上生(じょうしょう)仏・上品中生仏・上品下生仏)のみ公開されていました。

総門の脇道から西へ歩いて目黒通りを渡ると、左手に致航山満願寺があります。しかし、山門と本堂はいずれも修復工事中で、白いシートが見えるばかり。何とか見ることのできた山門の額「致航山」の文字は、江戸中期の儒学者・書家の細井光沢の筆によるものです。本堂裏手の墓地には細井一族の墓に囲まれて光沢の墓がありましたが、国指定史跡というのに案内板もなく、探すのが一苦労でした。ここから等々力駅まで歩いて、帰途につきました。

【取材】歩いた人(文・写真とも)：
広報部会・菊池真一

(えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています)

催事案内

古文書講座

◆5月から第1期を開講

新年度第1期は5月から開講します。申込の受付は終了していますが、以下日程をお知らせします。

◆入門編
- 講師：田中潤さん(学習院大学非常勤講師)
- 開催日：5／11(水)、6／1(水)、7／6(水)

◆初級編
- 講師：安藤奈々さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：5／18(水)、6／15(水)、7／20(水)

◆中級編
- 講師：吉成香澄さん(豊島区教育委員会文化財保護専門員)
- 開催日：5／21(土)、6／18(土)、7／23(土)

- 時間：各講座とも
  午前の講座は10時30分～12時30分
  午後の講座は14時～16時
- 会場：各講座とも江戸博1階会議室
- 参加費：各講座とも全3回1,500円(初回一括払い)

【企画担当責任者】宮　俊(事業部会)

訂正してお詫びいたします。

『えど友』90号4ページ掲載の〔「古文書―文字で記された歴史情報―」に親しむために！〕の筆者、事業部会の古文書企画担当責任者、宮俊さんのお名前の読み方を（みやとし）さんとしていましたが、正しくは（みや たかし）さんです。思い込みで確認が不十分でした。

友の会特別観覧会

●特別展
「大妖怪展　土偶から妖怪ウォッチまで」

◆妖怪は、日本人が古くから抱いてきた、異界への恐れ・不安感、また“身近なもの”を慈しむ心が造形化されたものです。本展では縄文時代の土偶から、平安・鎌倉時代の地獄絵、中世の絵巻、江戸時代の浮世絵、そして現代の「妖怪ウォッチ」まで、国宝・重要文化財を含む一級の美術品で紹介します。

- 開催日：7月8日(金)
  17時～17時30分：見どころ解説　我妻学芸員
  17時30分～19時：特別展示室自由観覧
- 申込締切：6月27日(月)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階ホール／1階特別展示室
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】玉木達二(事業部会)

友の会セミナー

第165回「花のお江戸を馬が行く」

講師　村井　文彦さん(馬の博物館　学芸員)

◆お江戸八百八町を行き交う人の群れ、活気あふれるその傍らには数多くの馬の姿がありました。町中を馬が行くなど、現代ではめったに見られない情景です。しかし、昭和30年代にいたるまで、馬車が東京を走っていたといいます。いわんや武家中心の世。「弓馬の道」という言葉のある通り、馬はなくてはならなかったことでしょう。さらに江戸の町へは近郊の農村からも馬が乗り入れていました。大都市江戸の馬事情はどのようであったでしょう。史料や絵画を軸に解説していただきます。

◆講師略歴：むらい・ふみひこ
昭和32年(1957)生れ。1986年立教大学大学院修了。専攻は日本近世史(江戸近郊農村など)。JRA競馬博物館主任学芸員等を経て、現在「馬の博物館」調査役・学芸員。専門：人馬一体の日本史。江戸時代を中心に古今東西、広く人と馬のかかわりの研究を目指しています。

- 開催日時：6月11日(土)　14時～15時30分
- 申込締切：6月2日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】国定美津子(事業部会)

第8回「えど友研究発表会」の発表者を募集します

ご好評をいただいております「えど友研究発表会」を今年度も行います。発表会の主旨は、長年の研究・調査の結果を発表したいという会員のニーズに応えるとともに、質疑応答や討議を通じ会員相互の交流を深め、友の会の一層の活性化に資するというものです。

発表テーマは「江戸東京の歴史と文化に関するもの」とし、特定の政治・宗教・信条・事業等の宣伝・広報に類するものは不可とします。また、発表者は友の会会員に限るものとし、講演料等のお支払いは致しません。2テーマを予定し、1テーマにつき質疑応答を含め1時間程度の予定です。

発表会は8月2日(火)の午後1時から江戸博1階会議室で開催予定です。日頃の成果発表に奮ってご応募くださるよう発表者を募集します。

発表を希望する方は、はがきに「発表会応募」と明記し、氏名、会員番号、電話番号、テーマを書いて事務局宛お送りください。折り返し「えど友研究発表会申込書」をお送りしますので、所要事項をご記入の上事務局へご返送ください。同申込書の提出をもって正式の応募といたします。応募締め切りは5月12日(木)です。なお応募多数の場合は調整させていただきますが、その結果につきましては6月上旬に応募者にご連絡いたします。

【企画担当責任者】内山文伸(事業部会)

第 16 回定期総会開催のご案内

新しく入会された方の参加を歓迎します

今年も友の会定期総会の季節がやってきました。定期総会は会員が一堂に会し、過去１年の活動を振り返るとともに本年度の活動について率直な意見交換のできる場です。同封の議案書をご検討いただき、多くの会員の皆さんがご出席くださるよう、お願い致します。

開催要領は次のとおりです。

●平成 28 年度　友の会定期総会

日時：５月27日(金)13時15分開会

会場：江戸東京博物館・１階ホール

◇主な議案

・平成27年度事業報告ならびに収支決算報告

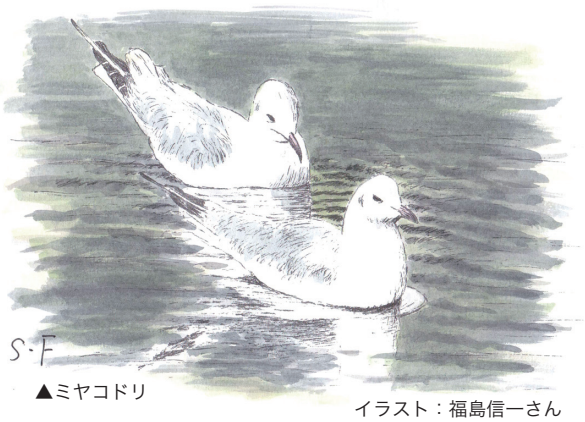
・平成28年度事業計画案ならびに事業予算案

●竹内館長の記念講演

総会に続いて、江戸東京博物館竹内誠館長による記念講演が予定されています。演題は「浅草寺日記の世界」です。ご期待下さい。

●会員交流会

記念講演会終了後、16時45分より、７階「桜茶寮」において会員交流会を開催致します。会員同士の交流、親睦を深める良い機会ですので是非ご参加下さい。会費は1,000円です。



▲ミヤコドリ

イラスト：福島信一さん

会員優待のお知らせ

好評開催中！

●2016年ＮＨＫ大河ドラマ特別展
「真田丸」

会　期：４月29日(金･祝)～６月19日(日)

会　員：一般670円、65歳以上340円、大･専門生540円

同伴者：一般1,080円、65歳以上540円、大･専門生860円

＊高校生は65歳以上と同じ。中学生以下は無料。

●(注)割引を受けられる同伴者は１人だけです。

次回予告

●特別展
「大妖怪展　土偶から妖怪ウォッチまで」

会　期：７月５日(火)～８月28日(日)

会　員：一般670円、65歳以上340円、大･専門生540円

同伴者：一般1,080円、65歳以上540円、大･専門生860円

＊高校生、中学生、小学生は65歳以上と同じ。

●(注)割引を受けられる同伴者は１人だけです。

会期残り僅か お見逃しなく！

企画展のご案内

●近代百貨店の誕生　三越呉服店

会　期：3月19日(土)～5月15日(日)

会　場：常設展示室　５Ｆ企画展示室

次回予告

●発掘された日本列島2016

会　期：６月４日(土)～７月24日(日)

会　場：常設展示室　５Ｆ企画展示室

休館日

5月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

6月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30		

催事のお申込方法

◆普通はがきに、
①催事名(略名可)・開催日
②会員番号(必須)
③氏名(同伴者連記)
を明記して下記の「友の会事務局」へ。

◆申込は、催事ごとに会員１人１通。

◆友の会へのご意見・ご要望があれば記入してください。

◆申込先：〒130-0015　東京都墨田区横網１－４－１
江戸東京博物館「友の会事務局」

＊**「えどはくカルチャー」など江戸博への申込とは違います。**

＊お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付で登録してください。

なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。

＊いずれも**申込多数の場合は抽選となることがあります**。

＊「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく事務局員出勤の**火曜日か金曜日(10 時～12 時、13 時～17 時)**にお願いします。

＊「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加ください。

会報＜えど友＞第 91 号
平成 28 年５月１日発行（奇数月１日発行）
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会
E-Mail : edo_tomo_koho@yahoo.co.jp

発行人：畠中　勇(会長)　編集長：中村貞子
岡本　脩、福島信一、内匠屋京子、佐藤美代子、前田太門、菊池真一、竹中祐見子、光田憲雄、大橋弘依、田辺友紀子
発行：江戸東京博物館友の会
〒130-0015　東京都墨田区横網１－４－１　電話 03-3626-9910